

心に残ったエピソード

心に残ったエピソードというテーマをいただいたとき、一番に浮かんだことは、看護の日に発表されるエピソードのことでした。毎年、素敵なエピソードが発表され、自身の看護を振り返る機会となっています。いろいろな患者さんのこと、看護のことを思い出し、気持ちが引き締まる思いで拝見していました。いざ、私の心に残るエピソードを書こうとしたとき、心に残ることが多く、悩みました。そこで、今でも大切にしていることを教えてくれた患者さんのことを書くことにしました。

私が新人のころ、がんの疼痛に対しての治療は、現在のように麻薬を使用しての疼痛のコントロールは行われていませんでした。疼痛時の鎮痛剤の指示は、「疼痛時6時間空けて使用」というものでした。詳細は記憶にないのですが、60代のがんの女性で、ターミナルの患者さんでした。夫が付き添いをしていて、新人の私にもよく声をかけてくれたことを覚えています。

痛みが徐々に強くなり、6時間という時間では薬の効果がなくなってきていた時でした。夜勤の私が担当したとき、「痛がっているから何とかならないか」と言われ、前回痛み止めを使用してからは、6時間経過していないので、使用することはできません。患者さんのところに行くと、痛がって体を丸めうなっている状況でした。私は、「痛いですよね。もう少し薬は使えないんですよ」と声をかけ、背中をさすっていました。困り果ててした行動でしたが、後で「あの時背中をさすってくれたことがとてもうれしかったよ」と言ってくれました。

その時の言葉が、いまでも心に残っています。今では疼痛のコントロールがされるようになり、このような患者さんは少なくなっています。しかし、わたしの看護観は、この患者さんの看護によって培われたと思います。正しく薬を投与することは大切ですが、痛いところをさすったり、便秘の方のお腹をマッサージしたり、熱感はないか、手足は冷たくないかなど、看護の手でできることを今後も大切にしたいと思います。

副会長 内堀由美子

起き上がりこぼし(勇気がでた出来事)

起き上がり小法師(おきあがりこぼし)は会津を代表する縁起物で、転んでもすぐに立ち上がる場所から、粘り強さと健康のシンボルとして縁起がいいとされています。毎年初市で家族の人数より1個多く買う習わしがあり、会津の家庭には欠かせない縁起物になっています。

～以下本文です～

横たわる妻にそっとキスをする。救急車のサイレン、コードブルー、アラーム音、モニター画面のフラッシュライン。80代夫婦の別れのシーンである。

12月に開院を迎えた病院の外来で働くピカピカの新人看護師、それが私だ。混乱のさなか開院から三週間で体験したこのシーンは、私が医療人として初めて経験した臨終の場面だ。長年連れ添った夫妻の歴史が垣間見える気がした。こうして患者の人生にふれ影響を与え与えられる仕事、そういう職業についたのだと心新たにできたことであった。

自治医科大学附属病院 稲川敏江